

開通が更に発展を進め、昭和初期には片瀬海岸が海水浴場として繁栄するようになった。サナトリウムの建設された茅ヶ崎と平塚は、茅ヶ崎では別荘地と海水浴場が発展をみせたが、平塚は商工業都市としての道をたどった。

以上のように、昭和初期に湘南地域は東部から、交通網の発達、海水浴の普及により京浜地域の日帰り行楽地となり、別荘も最大戸数を数えた。しかし第2次世界大戦は湘南地域全体を保養地から住宅地域へと転換させた。山の手の別荘は分譲されて住宅に、海岸の別荘は会社の寮・保養所へと変わる一方、片瀬海岸西浜地区には東急系資本等による近代的観光施設が1950年代に建設されて、湘南地域の海浜レクリエーション地帯の中

心地となった。高度経済成長下、1964年の東京オリンピックやその後のレジャーブームを経て、観光の集約化が進行した。現在では、海水浴の他にヨット、サーフィン、ボードセーリング等海浜レクリエーションの多様化、個性化が進み、利用者主体は若者となり、四季を通じて利用されるようになった。

そして海浜レクリエーション地帯と住宅地との交錯は、自然環境の悪化と共に多くの問題を生み、レクリエーション利用に新たな秩序が求められているのが現状である。神奈川県湘南なぎさプラン（1985発表）や新地域計画等、行政側が主導して、新たな海岸文化の創造地となるよう湘南地域は脱皮を図ろうとしている。

## 清瀬市を中心とした病院の立地に関する地理学的考察

安岡節子

本研究は、数多くの病院が立地する清瀬市の病院街に焦点をあて、病院の立地に関し、地域とのかかわりとともに、その歴史的背景や疾病構造の変化などから、地理学的な視点にたって考察を行なうことを目的とした。

論文構成としては、第1章で清瀬市を概観し、第2章で多摩地区全体の病院の分布を調べ、その中での清瀬市の病院分布の特異性を明らかにするとともに、多摩地区における特殊病院の分布の特徴とその理由の考察を試みた。第3章では清瀬市に立地する、病院の集中している病院街について、その成立過程から現在に至るまでの経過を、すべてが元結核療養所であったことから結核の変遷とともに追っていき、現況と今後の課題についてもふれた。そして、第4章にて、清瀬市の地域構成を調べ、病院街と地域とのかかわりについて考察を行なった。

本論文の要旨は次のとおりである。

多摩地区の病院の分布を概観したところでは、人口に対する病院数では全国平均を下回っているが、1病院あたりの平均病床数では全国平均を大幅に上回っていた。それは多摩地区には、一般的に病床数の多い精神病院数が卓越していること、又一般病院でも多数の精神病床をかかえる病院が多いことなどが理由として考えられる。

市町村別に病院数を調べてみると、多い順に八王子市、町田市、清瀬市となっており、人口との比率を考えると、人口の少ない清瀬市に病院が集中しており、他の市町村と比べてかなりの不均衡をなしている。病床数でも同様で、清瀬市では八王子市に次いで病床数が多く、人口との比率でもやはり圧倒的に高い数字を示している。しかし、その病床の内容をみると、清瀬市では結核病床がかなり多く、八王子市、青梅市、町田市などでは精神病床が多い。又東村山市では大きな療養所があるためらい病床が多い。多摩地区の、それも都心部からより離れたこれらの地域に、精神、結核、伝染といった内容の特殊病院の割合が多いことは、多摩地区での大きな特徴といえる。それは、特殊病院が創設された当時、その性質上広い敷地や静かな環境を必要とし、患者もほとんどが入院でしかも長期療養が多いため、都心部にある必要がなく、都市の側でも特殊病院を内部に立地させるのは不都合であるから、都市の膨張につれて都市外方へと次第に押し出され、遠心的に移動をしてきたためである。

清瀬市にできた最初の結核療養所も、そのような遠心的移動の一つであった。昭和の初めの頃、まだ清瀬村の時で広大な雑木林が残されており、そこへ府立清瀬病院が建設されたのである。結核

は当時、死の病いと恐れられた伝染病であったから、結核療養所をつくるにあたっては、地域住民の猛反対があり大変な出来事であった。その困難な状況を乗り越え最初の結核療養所ができると、それに吸いつけられるように、芝山地区と呼ばれる一画に次々と結核療養所が建ち並び、最盛期には16施設にまで及んだ。そのため病院街と呼ばれるようになる。それが成立したとみられるのは昭和14年頃、ちょうど日中戦争が起これり日本が戦争に向けて貧しく苦しい時代を迎えた時期であり、結核が日本中で猛威をふるった時期でもあった。やがて医学の進歩とともに結核は減少し、病院

の数も減り、残った病院も普通病院へと轉身をとり、病院街は大きく変容する。そして現在、各病院では患者獲得のためそれぞれの病院の特徴を生かした診療内容の充実に努めている。また清瀬市においては、病院街ができたことが都市化への契機ともなった。昭和30年代以降は、結核治療の向上に伴う人々の結核に対する意識の変化と、結核療養所そのものの変化もあり、清瀬市は純農村地域から農業と医療の町へ、そして住宅地へと変遷していった。清瀬市はもはや、結核療養の町としてのイメージよりも、都市近郊の住宅地としてのイメージの方がまさっている。

## 所沢市の商業機能とその中心性

山口 恵理子

### 1 研究の目的・方法

本研究の対象地域とした、埼玉県所沢市は、昭和30年代半ば～40年代にかけて人口の急増をみた、住宅都市としての性格が強い都市である。しかし、最近市内における大型店の増加傾向は著しく、特に所沢駅周辺の商業集積は、高まりをみせる一方にある。そこで、本研究では、所沢市の商業機能について、特に所沢の中心商業地の形成過程とその動向、特徴について研究することを目的とした。さらに、所沢市と同様、首都20～30km圏に位置する近郊都市をとりあげ（柏、松戸、川越、町田）、近郊都市における中心商業地の特徴について考えるとともに、これらの比較をとおして、所沢市の特徴と問題点について考察を試みた。

研究は、既存の資料並びに、聞きとり調査、現地調査によってすすめる。

### 2 要旨

所沢市は、昭和30年代半ばから40年代にかけて、東京のベッドタウン都市として人口を急増させた。それにつれて、商業も着実な成長を示してきたのであるが、その人口規模の割には、商業機能は高いとは言えない状態であった。これは、急激に人口が増加したために、市域の商業地の拡大や再編成が、間に合わなかったからである。人口増加の傾向が落ち着きを見せはじめた昭和50年代に入って、ようやく、所沢市はその商業集積の高

まりを見せはじめ、特に、昭和54年から57年にかけての小売業年間販売額等の伸びは大きい。これは、大型店の著しい増加によってもたらされたもので、市内大型店売場面積は、昭和60年には昭和55年の3倍近くにまで増加している。具体的には、駅付近には総合店、市内周辺部の人口集積の高い地域では、スーパーマーケットが増加する傾向にあり、また、新しく主要道路沿いに立地する大型店も増加した。

こうした傾向の中で、とりわけ所沢駅西口のプロペ通りを中心とした地域における商業集積が進んでおり、所沢の中心商業地を形成している。一方、江戸時代から市の中心であった、銀座通り周辺地域は、駅から遠く、大型店の集積も進まなかったこと、さらには、道路交通状況の悪化などによって、商業地としての地位を年々低下させており、地域全体の地位の低下とも関連して、その対策が講じられている。

ところで、プロペ通りを中心とする所沢の中心商業地には、現在、市内全大型店売場面積の44%（8店）が集中し、昭和61年度には西武百貨店の開店も予定されている。このような、大型店の集中は、人口が急増した近郊都市において顕著にみられる現象であって、この研究で取り上げた柏、町田、松戸の各市においては、所沢市以上の大型店の集中が認められた。これらの都市の中心商業地における大型店の力は、大変強いのが特徴で、